

親子で納得 ニュースな経済学



経済ジャーナリスト・内田裕子

日本産の飛行機が世界で活躍するか

日本製の飛行機が、世界の空を飛ぶ夢が実現に近づいてきました。ところで飛行機はどこでつくられているか知っていますか。いま世界で一番たくさん飛行機をつくっているのは「ボーイング」社。アメリカの会社です。次は「エアバス」社。ヨーロッパの主な国が共同でお金を出している会社で、本社はフランスにあります。この2社で500人程度乗れる大型ジェット機の市場は独占されています。また定員100人程度の飛行機の製造を得意としているのは、ブラジルのエンブラエル社とカナダのボンバルディア社。

このように、世界の空で活躍する飛行機の会社の中に、日本の会社の名前を見つけることができます。あらゆるものをつくっている日本ですが、

生産されてこなかったのが飛行機です。日本人には飛行機はつくれないのかというと、そんなことはありません。外国の飛行機の会社のほとんどが、日本製の部品や素材を採用しているのです。

では、どうして日本は飛行機をつくってこなかったのでしょうか。じつは、36年前の1973年まで、日本は飛行機をつくっていました。「YS-11」という飛行機で、三菱重工をはじめ、数社が共同でつくって販売していました。しかし、事業として成り立たず、しりぞいたという歴史がありました。

しかし、「国産の飛行機をつくるのが悲願」という三菱重工は、飛行機をつくることをあきらめずに研究を続けてきました。そして去年、国産で初めて、小型ジェット機「MRJ」（三菱リージョナルジェット、70～100人乗り）を開発して販売すると発表しました。機体の軽量化で、ほかの会社の小型ジェットより燃費（一定の仕事に必要な燃料の量）が2～3割良くなるのが特徴です。ところが、この飛行機を買ってくれたのは全日空の25

機だけ。MRJでもうけるためには300以上の受注が必要なのですが、景気が悪くなっている

ことや、実績がないことで受注が伸びませんでした。「MRJ」も事業として成り立たないと心配していたところ、アメリカの航空会社から100機もの注文が入ったのです。「燃料が2割以上節約できる点」が選ばれた理由でした。

飛行機をつくるというのは部品の点数が多く、かかわる会社は約1500社もあり、産業として広がりが期待できます。がんばってもらって、メイド・イン・ジャパンの飛行機を見たいものですね。



MRJのイメージ ©朝日新聞

プロフィール 玉川大学芸術学部演劇専攻卒業後、大和証券に入社。2000年に財部誠一事務所に移籍。製造現場の取材や経営者のインタビューなどの仕事をこなす。テレビ出演、執筆、講演活動を通じて経済の情報を伝えている。